

小論文

受験番号	氏名
------	----

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

学問は「脳みそのパン」である

なぜ勉強するのか？ という問いに対して、ギリシャの偉大な哲学者であり生物学者の祖でもあるアリストテレスは「三つの知識」を考えた。①生活の必要のための知（実用の知）、②快樂のための知、③学問的（理論的）な知である。

「生活の必要のための知」とは、交通ルールを知らなければ自動車にひかれてしまうし、稲の生態や天候、そして水をどう引いてくるかという土木の知識がなければお米をつくることもできない。お金を稼ぐにはなんらかの専門家にならなければいけないが、そのためには勉強しなければならない。これらはすべて生活に必要な、実用の知だ。

また、勉強は「快樂」につながるものでもある。スポーツを楽しむにはルールを学ぶことが必要だ。さらに、現代社会のさまざまな技術は、よりおいしく、より便利に、より快適に、という私たちの快樂に奉仕するものでもある。

そして、アリストテレスが「高貴なる知」と呼ぶ「学問的な知」がある。アリストテレスの著書『けいじじょうがく形而上学』の冒頭には「すべての人は生まれながらにして知ることを欲する」と記されている。知ることは楽しみなんですね。知ることは安心への道でもある。自分がこの世の中でどういう位置を占めているのかを知ると安心できるが、逆に知らなければ不安が募る。知る楽しさをもとに、世界を知り、自分自身を知り、それによって世界の中での自分の位置を知る。これが学問の楽しさだ。

では次に、なぜ生物学を含む科学を学ぶ必要があるのかをわかりやすく説明しよう。

私たちが生きていくためには、三つのパンが必要だと私は思っている。「体のパン」「心のパン」「脳のパン」だ。

聖書に「人はパンのみにて生きるにあらず」という有名な言葉がある。パンを供給するための農学や経済学などを実学と呼ぶ。これが「体のパン」である。

しかし、私たちはパンがなければ生きていけないが、それだけでは満たされない。体だけでなく、心にもパンを与えなければ心が干からびてしまうだろう。そこで宗教や芸術といったものが「心のパン」に当たる。

三つめの「脳のパン」が理学部や文学部で行う学問だ。私たちの生活を便利にするためでもなく、たくさん食べ物をつくるためでもない。例えば、食べられないナマコを研究していてもあまり役に立たないが、このような学問を「虚学」という。

虚しい学問なんてひどい呼び方だが、なぜこんな生き物が存在するのかを研究したりして、世のさまざまな物事について知ることは、すなわち自分の世界を広げることになる。これによって脳みそが快感を覚えるのだ。

虚学とは霞^{かすみ}を食って生きる学問である、と常々私は公言しているが、ほんとうに虚学なんかやってもお金はなかなか稼げない。しかし、霞がなければ脳みそは枯れてしまう。君たちだって生きることとは関係なくとも、音楽が聴きたくなったり、絵画を見たくなくなったりするだろう。それが人間という存在だ。

理科なんて将来の自分の職業に関係ないから……なんて思ったら脳みそが偏った人間になってしまう。君たちは成長期なのだから食べ物と同様に偏食せず、いろいろな勉強をすべきだ。

出典：桐光学園＋ちくまプリマー新書編集部 編『何のために「学ぶ」のか <中学生からの大学講義>1』、筑摩書房、131-133、本川達雄 著、2015 年、一部改変

設問 1 文章を 150 字以上 200 字以内で要約しなさい。

設問 2 文章を読み、あなたは何を考えますか。550 字以上 600 字以内で述べなさい。